

「あら、どうしたの。獅童君」

僕……獅童蓮斗が保健室へ入ると、そう言って先生が出迎えてくれた。

この霧江優華先生は、若くてスタイルも良く、美人で、まるでモデルのようだ。

しかも面倒見が良く優しい、名前通りの人だ。

「どこか、具合が悪いのかしら？」

「いえ、そういうわけじゃないんですけど」

「じゃあ、何のご用？」

そう言って小さく首を傾げる先生の前で、僕は目を閉じて、精神を集中させた。

今日は、この先生を僕のものにするために、ここへ来たのだ。

先日ついに会得した、『この力』を使って――。



気が付くと、目の前にひとつの扉があった。

ここはいうなれば、精神の世界……いや、『存在の根源の世界』とでも言うべき場所だ。

そしてこの扉は、物質の世界で現在僕の目の前にいる、霧江優華という個体の存在につながる入口なのだ。

「お邪魔します」

一応そう言って、ゆっくりと扉を開け、中に入った。

いかにも女性らしい内装の部屋のあちこちに、無数の情報が散らばっている。

棚に並べられた本の中身、壁にあるいくつものボードの書き込み、時折ちかちかと輝きながら部屋を飛び交う、チャットか何かのような文字の集まり。

それらすべてが、霧江優華という存在を定義する情報なのだ。

「興味深いなあ」

僕はそんな部屋を見回しながら、しみじみとそう呟いた。

このまま、いつまでも観察していたいのは山々だが、まずは、先生を『書き換える』ことの方が先決だろう。

気を取り直すと、壁にかけられた中でも特に大きく目立つ、重要そうなボードに向かう。

「ええと……、今書かれていることは……」

名前：霧江優華
性別：女性
年齢：二十四歳
誕生日：十月二十五日
……

「うん、やっぱり基本的な情報ばかりだ」

それらにざっと目を通した上で、僕はそのボードに、次のような情報を書き加えていった。

「霧江優華は、ご主人様である獅童蓮斗のために生まれてきた、彼の奴隷である」

「霧江優華は、ご主人様からの命令には一切の疑問を持たず、絶対服従する」

「霧江優華は、ご主人様専用の肉穴性欲処理用具であり、求められれば何時いかなる状況でも応じる」

「霧江優華は、ご主人様以外の相手に対しては一切発情せず、特別な感情も抱かない」

以上の内容が、先生の存在そのものを定義する基礎的かつ重要な情報として書き込まれた。

これで、先生は……いや、優華は、僕の奴隷に、所有物になったはずだ。

早くその成果を確認したくて、昂奮が抑えきれない。

「さあ、物質の世界に戻るとするか」



目を開けると、元の保健室に戻ってきていた。

向こうの世界にいる間は時間が経過していないので、目の前にはあいかわらず、優華がいる。

「先生」

「はい」

僕が呼びかけると、彼女は従順に返事をする。

様子のがらりと変わっていた。

「そこに座って」

人差し指を床に指していった。

「はい」

一言だけ返事をして、優華先生は床に正座した。

普通に考えて、先生は生徒のこんな要求には従わないだろう。

僕は書き換えが完全に成功していることを確信した。

「優華、君は何者だ？」

「私は、獅童君の奴隷です」

即答だった。

「では、どうして君はここにいるんだ？」

「私が、獅童君のものだからです」

またもや、間髪入れずに答えた。

「よし。それじゃあ優華、命令だ。服を脱いで裸になれ」

「わかりました」

これも即座に承諾し、立ち上がったかと思うと、その場ですぐに脱ぎ始めた。

優華はそのまま全裸になると、再びその場に座り込み、命令を待つようにこちらを見つめている。

僕は彼女に近づき、正面に立った。

「ああ……。すごいな……」

思わず声が出た。

美しい顔立ちに、モデルのようなスタイル。

しかしそれだけではない。

彼女の身体からはメスとしての魅力がこれでもかというほど溢れ出ており、見ているだけで興奮してくる。

今すぐ押し倒して滅茶苦茶にしてやりたかったが、まだ我慢だ。

「優華。これから何をされるのかわかるね？」

「はい。獅童様に、私のことを犯していただけるのだと思います」

「よくわかっているじゃないか。そうだよ。お前のことを、思う存分犯すんだよ。そして、中にたっぷり出してやる。妊娠するまでね。嬉しいかい？ 嬉しいよね？」

「はい。とても嬉しく思います」